

日本発のSDGs・ウェルビーイング教育 についての一考察 (1)

高橋 史朗 (麗澤大学特別教授・モラロジー道德教育財団道德科学研究所教授)

1 SDGsの哲学を日本の伝統的価値観で充足する

昨年10月に東京都立大学、上智大学、日本大学、専修大学、聖心女子大学で行われた大学生アンケート調査によれば、「自国が侵略を受けたら、戦う」と答えたのは16.8%、「逃げる」が71.6%、「受け入れる」が11.6%であったという。留学生の9割近くが「戦う」と答えたのに対して、対照的な結果が浮き彫りになった。

ウクライナへのロシアの侵略を目の当たりにしても、自国への侵略を「自分事」として主体的に捉えられないのは一体なぜなのか？命を懸けて守るべき価値を教えてこなかった戦後日本の歴史教育、平和教育は、世界に稀有な若者を出現させた。中国や北朝鮮などの軍事的危機に直面している今日にあっても、「自分と国は関係ない」と言い切る日本の若者は一体どこに向かうのか。

このような国内状況の一方、石清水八幡宮の田中朋清権宮司は国連事務総長からSDGs文化推進委員長就任を次のように依頼されたという。

＜SDGsは、ともすればうわべだけのものになりがちです。それは、本質の哲学が明示されていないからです。…グテーレス国連事務総長は私の提言を歓迎して下さい、「日本人がもっと哲学の部分で充足してほしい」と言われました。世界の平和と持続可能性を考えたとき、日本の古来培ってきた鎮守の杜の知恵に内在する伝統的価値観や哲学を、教育や文化を通じて世界中の人たちと共有することが最も平和への近道ではないかと思っています。

例えば、日本の戦国時代においても、武士たちはお茶の席に刀を持ち込むことは決してしませんでした。日本人の心の根底には、受け継がれてきた伝統と知恵を人と人との付き合いに落とし込んでいく和の精神が流れています。農耕文化を通して、自然の恵みをいただく中で育ててきた、生かされていることへの感謝やおかげ様の心は、茶道や武道、和歌などの「道の文化」を生み出し、日本人の民族性、精神性を高めてきました。

日本をはじめ世界中で神道の精神や神々をモチーフにしたアニメである「君の名は」やジブリなどの作品が流行しました…日本の各地には、町や村の中心に鎮守の杜があって、ご先祖様が繋いでくれた文化が、人々に仲良く幸せに生きる知恵を与え、さらに温故知新の思想を以てアップグレードしながら、過去から現在へ、そして次の世代へ繋げてきたのです。

そうした文化の連続性の本質にあるのが親から子への「愛」です。…現代において世界中の人たちが求めている本質的な価値は日本の哲学であり、それは世界と共有が可能で、神道的な概念というのは、日本独自のものではなく世界中の人たちが共感できる信仰以前のもので、…宗教というから対立的に捉えてしまいがちですが、哲学だと考えれば、世界の国々と通じ合っていくことができます。

日本人の心の根底には、過去・現在・未来に繋がってきた価値観—お互いの幸せを願うという心—があって、それを日本は、常に温故知新の精神で今に受け継いでいる…博覧強記の生物学者であり神社合祀令の反対活動をしていた南方熊楠は、当時から神社と共にある「鎮守の杜」の重要性を指摘していました。人と自然が共に生きてきた祖先たちの知恵を見直すことが必要です。^{1>}

2 「鎮守の杜」の破壊が教育に与える影響

南方熊楠は昭和天皇が神島訪問時に、粘菌の御前講義を行った際に、「一枝も心して吹け沖つ神 わが天皇のめでまし森ぞ」と詠み、昭和天皇も「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠思ふ」という御製を詠まれた。

鶴見和子『南方熊楠・滕点の思想—未来のパラダイム転換に向けて—』（藤原書店、令和3年）によれば、南方熊楠が神社合祀に反対した理由は、①敬神の念を減殺する②人民の融和を妨げ対立を激化させる③地方を衰微させる④庶民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を乱す⑤愛郷心を損ず⑥土地の治安と利益に大害⑦勝景史蹟と古伝の湮（いん）滅にあるという。

鶴見によれば、20世紀は「ヨーロッパを基本にした進歩史観を科学技術の発展が支えた時代」であったが、21世紀に入り、「進歩史観と現代科学技術の組み合わせが持つ欠陥が浮き彫り」になった²。明治政府の中央集権化政策の一環として市町村合併が急速に進められ、一つの自然村に一つの産土社があったが、町村合併によって神社の統廃合を進め、数千年、数百年の間、神域の生態系を守ってきた「鎮守の杜」を破壊することに南方は警鐘を鳴らした。

神社の境内は人々の慰安の場であり、村の寄り合いの場でもあった。「鎮守の杜」の破壊がいかに教育に悪影響を与えるかについて南方熊楠は、次のように指摘している。

くわが国特有の天然風景は、わが国の曼荼羅ならん。…凡人には景色でも眺めて…人に言い得ず、みずからも解し果たさざるあいだに、何となく至道をぼんやりと感じ得（真如）、しばらくなりとも半日一日なりとも邪念を払い得、…学校教育などの及ぶべからざる大教育ならん。…風景ほど実に人世に有用なるものは少なしと知るべし^{3>}

3 社（やしろ）の意味と「根っこと翼」を与える神話の知

平成10年に赤坂プリンスホテルで開催された全国氏子青年協議会創立35周年記念式典の記念講演において、寛仁親王殿下は産経新聞の拙稿を引用されつつ、次のように指摘された。

＜明星大学の高橋史朗氏は、「神社の社は『いやしろ』といい、癒しの原点。神聖な場であると同時に心身ともに他と和合する場、いのちをよみがえらせる場、健やかに元気に生きる場である」と。「境内で耳を澄ますと、谷を走る水音が響き、木々を鳴らす風の音が聞こえる。『日本人の心の故郷』がそこにある」と結ばれていました。鎮守の杜の重要性を見事に言い表している文章とと思いました。⁴>

この「癒し」の伝統はわが国の伝統文化に深く根差しており、癒しの場である神社にみんなが集まって祭りをし、願いや祈りや憩いなどを通して、「癒し癒される」場が整えられ、踊りや相撲や集会、祈願などによって心が癒されてきたのである。

山崎正監修・山田富美雄編『癒しの科学：瞑想法―神秘主義を超えて―』（北大路書房、平成7年）によれば、癒しの意味を社（やしろ）が見事に象徴しており、①holy（穢れを払い、本来の姿になる神聖な場）、②whole（全体、集会の場）、③heal（いのちがよみがえる癒し、踊りの場）、④health（競技の場）、の4つの意味を社は含んでいる。

わが国には、古来より日常生活の罪穢れを大晦日に祓い流し、清浄な心身で新年を迎え、一年の“しあわせ”を祈願する伝統があるが、このように癒しは祈りと一体となって、「死と再生」を経験する「通過儀礼」としての機能を果たしてきた。私たちが常にこの「死と再生」のサイクルを継続的に経験しなければならないことを物語っているのが神話である。

神話学を通して伝えられる知恵＜神話の知＞は、「癒しの教育」が求められる21世紀の教育の在り方に大きな示唆を与えてくれる。美智子上皇后陛下が1998年にインドのニューデリーで開催された国際児童図書評議会のビデオ講演で強調された、子供たちに「悲しみに耐える『根っこ』と希望へと飛翔する『翼』を与えてくれる」教育こそが求められている。

国連難民高等弁務官であった緒方貞子氏は、日本は「人道大国」になって、「翼と根っこを持つように」世界に発信してほしいと訴えた。この生きる力の「根っこ」と希望へと飛翔する「翼」を与えてくれるものが＜神話の知＞であり、神道の伝統的価値観にほかならない。

4 異なるものの対決によるパラダイム転換と日本人の言霊信仰

鶴見和子によれば、多様性を排除しないで「異なるものの調和」を図る論理は「曼荼羅の論理」であるという。仏教学者の中村元が「南方曼荼羅⁵」と名付けたダイナミックなモデルの核心は「萃点⁶」にある。

「南方曼荼羅」は因果律の交錯した図であるが、南方は西欧近代科学の論理と古代仏教の論理とを統合することによって、生きている現実を捉えるのにより適わしい方法論を創出しようという壮大な試みに挑戦した。

大日如来を中心において、諸仏、諸神を配置した「真言曼荼羅」と、西欧の自然科学の支配的パラダイム、すなわち因果律と因縁、必然と偶然とを格闘させて作り出した「南方曼荼羅」の特徴は、矛盾対立するものも含めてあらゆる異なる要因、文化、思想、個体等々が交流し、必然と偶然が交わり合い、影響し合い、またそこから創造的に流出する場と

して設定し直した「萃点」にあった。

後述するユネスコの国際シンポで強調された「多様性に『通底する価値』を探る『対話』」は、萃点を移動しない「比較」的考察ではなく、視点を固定化せず、常に反対の視点から逆照射的に考察して「対決し、挑戦」することによって、自他ともに「変容」する「対話」に他ならない。

ところで、外山勝志元明治神宮宮司は、産経新聞の連載「宗教・心のページ」において、「日本人の言霊信仰見直す」と題して、次のように指摘されている。

く代々木の杜は夕暮れには虫の声が心地よく苑内に響きわたってきます。…永井荷風が昭和10年頃、秋の夜の浅草仲店で、あたり一面に鳴きしきるコオロギの声を聞いて「宝石を拾ったよりも嬉しく思った」（『来訪者』）と感じたような、鳥の声や虫の音、自然や人事の世界のあらゆる響きや匂い、情趣などから季節の移ろいを味わうことの幸福感。それを、たとえ都会生活においても、人生の楽しみとして追い求める慣習は、わが民族が長い歳月で培ってきた素晴らしい感性であり、文化です。

万葉時代、柿本人麻呂が「葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国」「しきしまの大和の国は言霊の助くる国ぞ」と詠じたように、日本人は声や言霊に、古くから慎み深い思いと特別な信仰を抱いてきました。言葉には人を動かす不思議な霊が宿っているという、いわゆる言霊信仰は、言葉が単に伝達手段ではなく、発せられた言葉そのものに霊力があるという信仰です。祝詞（のりと）がいにしえのまま美しい文体で神々に奏上されるのは、こうした祈りや感謝の言葉を発すること自体に威力があるということにほかなりません。^{7>}

このような素晴らしい感性文化を見直し、季節の移ろいをしみじみ味わうことで得られる幸福感を日常生活の中で取り戻すことが私たちに求められているのではないか。日本人のGNH（国民総幸福量）は昨年、62位で先進国中最下位であった。

また、74か国のPISA（経済開発機構・生徒の学習到達度調査）高校生調査によれば、「学校をさぼっている」「人生に目的、意義がある」と答えたのは、いずれも日本が74位であった。つまり、どの国よりも一生懸命学校に通っているが、幸福度が最低であることを物語っている。

前述した田中権宮司は、「みんなが幸せに生きていくための本質的な価値を、文化を受け継ぐ中で結晶化させる」ことの大切さを強調されているが、その幸福のための本質的価値観のキーワードが「感謝」であることを、東京オリンピックは教えてくれたのではないか。

「難が有るから、有難い」という[ARIGATO]の精神が、「悲しみに耐える『根っこ』と希望へと飛翔する『翼』」を与えてくれることを、白血病を見事に乗り越えた池江瑠華選手を初めとする多くのオリンピック選手が再認識させてくれた。

この「感謝」という日本の感性文化の原点に立ち返ることによって、出口が中々見えないコロナ禍や相次ぐ自然災害に対処する生き方を再発見することが、私たちに求められているのではないか。

WGIPを陣頭指揮したブラッドフォード・スミスが1942年に書いた論文「日本精神」によれば、日本精神の3本柱の中核は神道であるが、その神道で国連が推進するSDGsの哲

学を充足してほしい、というのは隔世の感がして感慨深い。

5 日本文化の伝統的価値の創造的再発見

日本文化の伝統的価値について研究を積み重ねた通産省生活産業局が平成5年に編集した「感性社会における企業、産業に関する研究会」報告書は、21世紀の社会は個人や企業が「感性」を重要な座標軸とする「感性社会」が展望されるとして、日本の伝統文化である茶道、華道の精神や、漆、刀鍛冶等の伝統技術の「伝統的価値の再発見」が必要であると強調した⁸。

これを受け継いだ経済産業省では、日本的価値を基盤とした日本のものづくりの再評価により、日本ブランドを構築するため、「日本らしさ」、「日本の根源」について検討し、提言を重ねてきた。

平成17年7月の「新日本様式」では、「日本らしさ」の多様性の中核は「日本人の自然観」であることを示し、「伝統」と「先端技術」を融合させた日本らしさを示すコンセプトのキーワードである(1)「たくみのところ」、(2)「ふるまいのところ」、(3)「もてなしのところ」を発信した。

(1)は素材の良さを活かしつつ、新しい技術や文化を創り出すところ、(2)は様々な考えや新しいもの(多様性)を尊重し、さらに自己を確立し、両者を調和させるところ、(3)は責任意識を持ちながら、個性を磨き、気品と気概を重んじるところである。

平成19年には「感性価値創造イニシアティブ」、平成23年に「新しい日本の創造」などの提言を行い、平成27年には、地域にプロデューサーを派遣するなどして、まだ広く知られていない日本の製品500を発掘する「The Wonder 500」と名付けたプロジェクトを実施し、産品を生み出したストーリーとともに世界に発信するなど、日本の「感性」を活かしたブランドの構築・発信を行ってきた。

平成28年に公表された「クールジャパン商材を活用した我が国感性価値の再構築調査」によれば、外国人に日本の魅力を分かりやすく伝えるためにも、新しい日本らしさを再定義して、国際発信していくことが求められている。

さらに、ものづくりの現場においても顧客側の潜在的なニーズを探り当て、顧客の価値観に合わせた「ことづくり」にシフトしている。ものの背景にあるストーリーに共感して、消費行動が生まれるという感性価値が重要視される時代が到来している。

そのため、従来よりも一層海外ユーザーの視点が重要性を増しており、海外からも共感できる新しい日本らしさを再検討し、創造的に再発見する必要がある。こうした問題意識に基づき、日本のものづくりやサービスを支える日本人固有の伝統的価値観に裏打ちされ「The Wonder 500」認定商材を題材として、これらから導かれる地域の伝統や生活文化に根差したストーリーをコンセプトブックとして編纂し、「世界が驚く日本」研究会が発足した。

同研究会と並行して、海外でのアンケート調査や外国人留学生を対象としたワークショップの実施を通じて、海外の視点からのストーリーの追加と深化を行い、海外の方が共感できるコンセプトの再構築を目指している。

次に、日本人固有の感性価値について列挙しよう。まず第一の価値観は「多彩な色彩感

覚」で、春夏秋冬、四季折々の花鳥風月に彩られる日本の自然の表情は、人々の繊細な感性を育み多彩な色が生まれる原風景であった。そのような情緒豊かでみずみずしい感性はものづくりの世界にも表れ、日本文化の礎となっている。

第二の価値観は「繊細で豊富な味覚」で、全国各地で海や山の幸、野菜など多種多様な食材が手に入る。そうした地理的風土の中で日本人は豊かで繊細な味覚を身に着け、多くの洗練された食が生まれた。

第三の価値観は「地域に根差した多様性」であり、第四の価値観は「外来のものを日本流に再編集（アレンジ）する力」で、外国の文化を受容するだけでなく、新たな視点で再編集を加え、絶えず創意工夫を重ねることによって、唯一無二の「日本流」を誕生させ、世界へ向けた発信力へと転換させてきた。

第五の価値観は「無駄をそぎ落とす美意識」で、簡素とか清楚、端麗なものに対して純粹な本質や真理を見出す美意識で、豪華絢爛とは逆である。西洋の庭園のような人工的な造形美を味わうのではなく、自然の似姿を味わう日本庭園に代表される。生水を重視し旬のものを使う日本の懐石料理や山家料理、日本独特の刺身や流しそうめんなども、簡素の美と味を本領とする「淡」の文化の象徴といえる⁹。

第六の価値観は、師に学び、その教えを知恵や技として型・道の衣鉢を受け継ぐ「継承」という考え方である。書道では型を学ぶことを「節臨」といい、心を学ぶことを「意臨」という。

第七の価値観は「守破離」の考え方である。千利休は「規矩作法 守り尽して破るとも 離るとても 基（本）を忘るな」と詠んだが、文科省の中央教育審議会は平成12年12月の「審議まとめ要旨」に次のように明記した。

「我が国の伝統文化の世界では、独創性を発揮するためには、“型”と呼ばれる基礎的・基本的な事柄を完全に身につけた上で、それを超えることが必要とされており、こうした考え方は大きな示唆を与えてくれる。」¹⁰

第八の価値観は「おもてなしの姿勢」であり、第九の価値観は「素材を活かす姿勢」である。前述した調査には、それぞれの具体的事例が詳細に紹介されていて大変興味深い。

東日本大震災の三日後の現地取材した米ABCテレビは、「日本人の精神の根底には『一体 (come together as one body)』という価値観がある」と報じたように、日本人には弱さに寄り添うケアの心があり、自他一体の共同体感覚と、調和・協調の精神が世界から尊敬される、日本人の国民性といえる。

6 キーワードは「間」「道」「和」

世界が驚く“Spirit of Japan”とは一体何か。日本人独特の自然観は、神道的なアニミズムや無常観を生み、禅の思想にも繋がっている。対立する概念や矛盾を受け入れながら、自らを中立的な位置に置き、あるがままの状態の中に美しさや意味を見出そうとする「『間』の感覚」や、人と人、人と自然の間を重視する「『間』の文化」を生み出した。

日本人にとっての自然とは、「最も理に適った、調和のとれた状態」で、目指すべき調和のとれた状態を日本人は「和」と呼んだ。聖徳太子が「和を以て貴しとなす」と説いた17条憲法の第1条には、「和」を目指すことが全ての物事の真理・理法に通じるという意

味が込められている。

自然から「間」を見出した日本人は、「和」を成すことを求めて、心（内なる自然）と体、そして体と環境（外なる自然）を一つにしようと努め、精神を磨き、身体感覚を整え、礼儀作法を生み出し、こうした「和」を目指す日本人の生活観の中から、「道」を求める思想が生まれた。二律背反する欲求の間のニュートラルな状態に自らを置く感性が「間」であり、「道」とは、対立する感性を繋ぎとめ、心と体を整える価値観の体系といえる。

「道」とは、もともと道教、儒教などの中国思想に基づく言葉であるが、日本人は心と体を整え、調和された状態へと導くための価値観や行動様式を、「道」として体系化してきた。大谷翔平選手が世界の注目を集めている教育的背景には、挨拶・返事・整理整頓という「躰の三原則」や型を守り、型を破って、独自の手法へと磨き上げる「守破離」の伝統精神がある。詳しくは、「道徳サロン」の拙稿連載53を参照されたい。「型」が磨かれると「技」となり、「技」を体系化したものが「道」となり、心と体を調和した状態（「和」）へと整えるための価値観の体系が「道」であり、日本人に最も特有の感性こそが「道」である。

日本人にとっての「道具」とは、決して単なる「Tool」ではない。そこには、同化感覚を磨いてきた日本人独特の「迎え入れ」の感性が潜んでいる。例えば、日本人は涼をとる際に風鈴を鳴らし、暖をとる際には火鉢にじっと手を当てる。部屋の空気を冷やしたり暖めたりする前に、日本人は自らの「内なる感性」を研ぎ澄ませ、変えようとする。

日本人にとって「道具」とは「道を具えるもの」すなわち、モノを使う人の感性を磨くためにあるものである。洋楽は楽器自体を絶え間なく進化させていくが、和楽は琴も琵琶も太鼓も楽器を演奏する人の感性を深化させ、終わりのない「道」の探求に通じている。

こうして道具には「道」の精神が宿り、研ぎ（極め）の文化、経年変化を愛でる習慣、作り手八部、使い手二部といった伝統的なものづくり文化・職人文化に至っているのである。

このようにして日本人独特の自然観、同化感覚を磨き、調和を目指す感性が、「間・道・和」という独特の価値観を生み出し、日本人のライフスタイル、それを支えるものづくり文化へとつながっている。これらは現代にも継承され、以下のキーワードに代表される日本のものづくりのコンセプトに現れている。

- (1) 突きつめる（極める、そぎ落とす、細部へのこだわり、職人芸、身体感覚の重視、手の平文化、洗練・優美、用の美、振る舞い・行為の美意識、鋭敏な感性など）
- (2) 学びとる（受け入れる姿勢、変化への柔軟性、日本古来の伝統と外来のものとの融合、不易流行、技術の伝承、守破離、型と型破りなど）
- (3) 合わせる（アレンジ・再編集する、見立て、新しいものと古いものとの融合、都市と自然の共存など）
- (4) 源をいかす（素材を活かす、循環型志向、縮み志向、繊細な味覚、独特の色彩感覚など）
- (5) 思いをよせる（おもてなし、感謝の気持ち、以心伝心、快適さと利便性を両立した商品、謙虚さなど）¹¹

7 SDGsの「開発 (development)」の意味を問い直す

効率性・利便性・均一性を重視する機械論的世界観に立脚して、一律的な「開発 (development)」を目指してきた西欧型の「自立型社会」から、複雑系の自律的秩序形成機能を活かす日本型の「自律型社会」への転換が求められている。神道の中で受け継がれてきた「産霊 (むすひ・むすび)」が自律的秩序形成機能に他ならない。産霊は自然界が秩序を産む霊妙な働きを意味している。ノーベル化学賞を受賞したプリゴジンが「散逸構造論」において指摘した「自律的秩序形成機能」を活かそうとする伝統を2千年以上前から大切にしてきた日本文化の伝統は、人と自然との関係を大切にする日本人の感性によって育まれたものである¹²。

この視点からSDGsの「開発 (development)」の意味を根本的に問い直す必要がある。中村桂子氏によれば、「進化 (evolution)」は多様な内発的展開を意味するが、「開発」は一律的になっている点に問題がある。生きものの発生 (development) という言葉が示す世界観そのものを見直す必要がある。機械論的世界観に基づく「進歩」は利便性・効率性・均一性を重視するが、その限界と「継続性」の重要性に気づいたからSDGsが提唱されるに至った。

「持続可能な (sustainable)」という言葉は継続性を重視するが、その後に「開発 (development)」という一律的な言葉を続けて「目標 (goal)」にした点を見直す必要がある。

中村桂子氏によれば、「グローバル」という言葉も本来は地球の各地域の多様な価値観を尊重するものであるが、今日では一律的な特定の価値観を意味するようになってしまった。「ポスト・コロナ」という言葉の世界観も、コロナと戦って勝ち、コロナと関係のない社会をイメージしているが、コロナと共存する中で賢く生きる生き方や社会を目指す必要があるのではないか。「脱炭素」ということが示す世界観にも同様の問題点がある。炭素化合物は生き物の根幹であり、炭素を上手に循環させる社会を目指す必要がある。

21世紀の現代科学が辿りついた複雑系の自律的秩序形成機能を、日本の伝統文化は2千年以上前から尊重し、全体との調和の中で「和を成して」多様性を活かし、違いに学び、違いを活かし合い、補い合う「共活」、そして自他の利害の単なる調整を超えて自他がつながり合い、支え合って、相互補完性を重視した新しい秩序を共につくっていく「共創」社会を目指してきたのである。こうした文明論的視点から日本文化を創造的に再発見し、SDGsを日本発の「常若」の視点から捉え直す必要がある。

8 SDGsを「常若」の英知で捉え直す

平成11年5月3日にワシントンで開催された「世界の歴史的な都市と宗教的な聖地の建物保存に関する国際シンポジウム」において、所功麗澤大学客員教授が「日本の聖地、古くて新しい伊勢神宮—20年ごとに継承する“常若”の英知—」と題する基調講演を行った。その要点は次の通りである。

- (1) 式年遷宮を繰り返すことにより、20年ごとに建物や神宝・装束などをつくれる優

秀な人材と高度な技術が確実に継承されてきた。

- (2) しかも社殿造営に毎回1万本以上も必要な桧材は、3百年以上の美林を持つ木曾山から伐り出されてきたが、現在さらに2百年先に備えて神宮近くの宮域林が育成されている、
- (3) このような大事業を継続できる要因は、太陽神とも皇祖神とも信じられる天照大神のような神々を敬い尊ぶ純朴な信仰が、皇室にも国民の大半にも根強くあるからである。
- (4) これによって伊勢の神宮をはじめ全国の神社では、自然を敬い祖先を尊ぶ祭祀が、常に若々しい“常若” (everlasting youthfulness) の生命を保って現代に続いている。

この基調講演に対して、「造営はなぜ20年ごとなのか。また、なぜすべて造り替えてしまうのか?」「このような式年遷宮を行うことは、日本の一般国民の日常生活と何か関係があるのか?」などの質問があったという¹³。

20年の根拠については、大和総研調査本部主席研究員の川口真理子氏によれば、以下のような説があるという。

- (1) 神殿の耐久性と尊厳維持説：神殿に相応しく常にすがすがしく尊厳な姿を保つためには20年が限度と考えられる。
- (2) 技術伝承説：伝統技術を次世代に継承するためには、職人の世代交代も考えると20年というサイクルがふさわしい、
- (3) 経済波及効果・環境保全効果：20年に一度檜や葺、神宝など膨大な資材への需要を創出することで、山林や田畑の整備や宝飾品や装束などの工芸品の産業を育成することができる。
- (4) 保存期間説：神税として備蓄された保存期間は20年が限度。
- (5) 古代は20が満数とされていたので、一区切りを20年に定めた。
- (6) 常若説：20年サイクルで壊して新しく造ることは、死と再生という生命の循環を示している。また、常に再生されるので、永遠の若々しさを保つことができる¹⁴。

この中で最も説得力があるのが「常若」説であり、これは伊勢神宮のウェブサイト上でも式年遷宮のコンセプトとして紹介されている。ギリシャ神殿のように堅牢な石造りの建築物ではなく、20年毎に造り変えることで永遠の若さ(常若)を保ち、「壊れないもの」ではなく「壊れやすいものを壊して再生して」永遠を目指すのである。

神宮司庁文化部長の矢野憲一氏は、「式年遷宮のシステムは、生物が親から子へと生まれ変わることにより、個体の永遠の生命を引き継ぐ発想を取り入れたのだと思う。これは当然のように見えるが、世界のどこにもない文化の伝承方法である。きっと稲作の思想から来たのであろう¹⁵」と指摘している。

9 SDGsの目標達成のカギを握る「持続可能な開発のための教育(ESD)」

SDGsの目標達成のカギを握るのは、「持続可能な開発のための教育(ESD)」である。ノー

ベル化学賞を受賞したプリゴジンが発見した「自律的秩序形成機能」（これが子供の「発達力」「発達資産」に他ならない）に注目したホーリズムから、感性・情緒を中核とする日本の伝統文化の価値観を捉え直し、経済の開発、社会の発展、環境の保全の持続可能な開発の土台が教育にあることを明確に指摘したのが、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development, 略称はESD）である。

このESDは2002年の持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグ・サミット）において、我が国の提案によって世界首脳会議に「ESDの10年」に関する声明が盛り込まれ、国連は2005年からの10年間を「国連ESDの10年」として、ユネスコを主導機関に指名し、ユネスコが策定した国際実施計画が国連総会で承認され、2009年にはドイツで「ESD世界会議」が開催された。

2012年にブラジルで「国連持続可能な開発会議」が開催され、宣言文の中に2015年以降もESDを推進することが盛り込まれた。さらに、2014年にESDに関するユネスコ世界会議が名古屋市と岡山市で開催され、日本発の「持続可能な開発のための教育」が世界に浸透した。

筆者が政府の臨時教育審議会を代表して米英仏蘭の海外視察¹⁶をした折に、OECD（経済協力開発機構）の代表と学力の中核である「キー・コンピテンシー」¹⁷について激論を交わしたが、OECDは「キー・コンピテンシー」について、次のように定義している。

- (1) 社会・文化的、持続的ツールを相互作用的に活用する能力
 - ① 言語、シンボル、テキストを活用する能力
 - ② 知識や情報を活用する能力
 - ③ テクノロジーを活用する能力
- (2) 多様な社会グループにおける人間関係形成能力
 - ① 円滑な人間関係を構築する能力
 - ② 協調する能力
 - ③ 利害の対立を御し、解決する能力
- (3) 自律的に行動する能力
 - ① 大局的に行動する能力
 - ② 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
 - ③ 自らの権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

ESDを推進するためには、こうした「キー・コンピテンシー」すなわち、「生きる力」「人間力」を育成する必要がある。この考え方は日本の「教育振興基本計画」「学習指導要領」にも取り入れられたが、この「持続可能な開発」や「キー・コンピテンシー」のお手本が1万数千年続いた我が国の縄文文明にある、と伊勢雅臣筑波大非常勤講師は指摘する。

10 縄文文明が示す持続可能性の5原則とSDGsの目標との関係

SDGsの経済圏の目標を自然との和、社会圏の目標を共同体の和を育てた縄文文明の持続可能を実現する5原則の再発見によって、乗り越えていく必要がある。伊勢雅臣氏によ

れば、持続可能性を実現する5原則は次の通りである。

- (1) 自立性—共同体を守るための最重要課題
共同体が経済的に自立できると、安定的な共同体の和を生み出す。
- (2) 分散性—生命圏そのものの本質への随順
経済性を落とさずに、いかに人口分散を図るかが持続可能性の鍵を握っている。
- (3) 適応性—気候・風土・植生に適応した暮らし
自然との和を回復するには、自然の多様性を受け入れ、各地域の気候風土に適応したライフスタイルが不可欠であり、各地方で発達した独自の食べ物や生活スタイルが、その地域の人々を結び付けて、共同体を育てる。栄養学衛生学者の島田彰夫氏によれば、伝統的な日本食は、一つの民族が何世代もかけて、どうすれば適切な栄養の摂取ができるかを追求し、到達した料理の体系に基づいている。(島田彰夫『身土不二を考える—ヒトと人間の食と健康』無明舎、参照)。
- (4) 循環性—自然の季節循環に従う
田植えや稲刈りなどの農作業は季節の循環性に基づいて行われ、縄文時代の「すべては神の分け命」という生命観が今も受け継がれ、伊勢神宮は20年ごとに建て替える循環性により、永遠のいのちを保っている。
- (5) 緩衝性—自然の変動を吸収する仕組み
縁側は、内なる生活と外なる自然を繋ぎつつ、適度の緩衝性を保つ工夫であり、緩衝性は共同体の和とも密接に関係している。縁側は近所の人々が気軽に立ち寄って、縁側に座って世間話をするなど、共同体の和を醸成する仕掛けでもある。大雨や洪水で共同体の一部が被害を受けた時に助け合うのは、和を通じた緩衝性といえる¹⁸。

SDGsの17の目標(日本ユニセフ協会トップページ参照)をバランスよく達成するためには、この5原則が必要不可欠であり、17の目標は生物圏、社会圏、経済圏の三層構造になっている。その土台である生物圏は自然との和を実現すべき対象であり、その課題は目標⑥⑬⑭⑮の4つである。

次に、社会圏の目標①～⑤⑦⑪⑯は、共同体の和によって、その他の経済圏の目標は、分散性・自立性が後押しし、「誰一人取り残さない」というSDGsのスローガンは、国民の一人ひとりが「処を得る」という歴代天皇に受け継がれてきた「国柱の精神」によって実現される(産経新聞 令和元年2月6日付「解答乱麻」の拙稿「日本の『国柱』を考える」参照)。ちなみに、明治天皇が五箇条の御誓文に添えて国民に出された御宸翰において、「天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば」と述べられている¹⁹。

20世紀の現代科学が辿りついた複雑系の自律的秩序形成機能を、日本人は「産霊(むすび)」というコンセプトとして、2千年以上も前から尊重し、それを活かそうとする「持続可能」な伝統文化を育んできた。

「色心不二」を説いた空海、「心身一如」を説いた道元は、心と身体を分離して考える弊に陥ることに警鐘を鳴らしたが、近代化によって理性は心に、感性は身体に引き付けられて解釈され、理性と感性は対立的に捉えられ、感性は理性に従属する低次の能力と捉え

られるようになってしまったのである。

日本発の「持続可能な開発のための教育」は、縄文文明が示す「持続可能性の5原則」を土台としたホリスティック(全包括的)な教育であり、感性と理性、心と身体、教師と児童生徒、親子の繋がり、関係性を重視する教育である。

11 SDGsと「持続可能な開発のための教育(ESD)」の関係

今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大など人類の開発活動に起因する様々な問題がある。「持続可能な開発のための教育(ESD)」とは、これらの現代社会の問題を自分事として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたって恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。

前述したように、ESDは2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で我が国が提唱した考え方であり、2013年の第37回ユネスコ総会で採択された「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」(2015-2019)に基づき、ユネスコを主導機関として国際的に取り組まれてきた。

2015年の国連サミットにおいて、先進国を含む国際社会全体の目標として「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択されたが、SDGsは「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲット(指標)によって構成されている。ESDはこのうち、目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に位置づけられているだけでなく、SDGsの17の全ての目標の実現に寄与するものであることが、第74回国連総会において確認されている。

持続可能な社会の創り手を育成するESDは、SDGsを達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するものであり、全てのSDGsの目標を達成するための基礎とされている。これは、2019年の第40回ユネスコ総会で採択されたESDの新たな国際的枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて(ESD for 2030)」においても明確となっている。

すなわち、同総会で採択された決議に、「ESDが質の高い教育に関する開発目標に必要な不可欠な要素であり、その他の全てのSDGsの成功への鍵として、ESDはSDGsの達成の不可欠な実施手段である」「加盟国政府および他のステークホルダーが、『ESD for 2030』の実施を通じて、ESDの行動を拡大することを奨励する」と明記されている。

ESD for 2030は、ESDの強化とSDGsの17の全ての目標実現への貢献を通じて、より公正で持続可能な世界の構築を目指すものである。ESD for 2030の採択を受けて、本枠組み下で取り組まれるべき具体的な行動を示すロードマップが、ユネスコより公表された。

ロードマップでは、5つの優先行動分野(①政策の推進、②学習環境の変革、③教育者の能力構築、④ユースのエンパワーメントと動員、⑤地域レベルでの活動の促進)及び6つの重点実施領域(①国レベルでのESD for 2030の実施、Country Initiativeの設定)、②パートナーシップとコラボレーション、③行動を促すための普及活動、④新たな課題や

傾向の追跡（証拠ベースでの進捗レビュー）、⑤資源の活用、⑥進捗モニタリングが提示されるとともに、GAPからの主な変更点として、SDGsの17の全ての目標実現に向けた教育の役割を強調、持続可能な開発に向けた大きな変革への重点化、ユネスコ加盟国によるリーダーシップへの重点化が謳われている。

2016年12月に発表された中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」には、「ESDは次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と明記され、幼稚園教育要領及び小中高学習指導要領において、全体の内容に係る前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられた。

12 SDGsとウェルビーイングの関係

「持続可能な開発のための教育（ESD）」はわが国が世界に提唱した日本発のビジョンであり、SDGsの経済の開発、社会の発展、環境の保全の持続可能な開発の土台が教育にあることを明らかにし、その基盤が伝統文化にあり、伝統文化と近代との融合による伝統文化の創造的継承の必要性が強調された点を見落としてはならない。

縦軸の伝統的な「とこわか（常若）文化」と横軸の近代市民社会の「平和・人権・環境・福祉・多文化共生・ジェンダー」教育等の視点をどのように融合し、ウェルビーイングとSDGsを包括的に捉えたビジョンをいかに世界に発信していくかが問われている。

ウェルビーイング教育の実現は、OECDが2019年に「学びの羅針盤」で目指したものであるが、我が国の伝統文化にも深く根差しており、日本型ウェルビーイングの原型が日本の昔話や古典にあることは、モラロジー道徳教育財団「道徳サロン」の拙稿連載77「日本的ウェルビーイングの原型を探る－日本の昔話と古典に学ぶ－」を参照されたい。

SDGsが示す持続可能な社会を実現するためには、ブータンの国民総幸福（GNH）調査の4つの柱である「伝統文化の保護と振興」「自然環境の保全」「公平で持続可能な社会経済開発」「良い政治」という視点が重要である。この4本柱に基づいて、GNH指標には、「時間の消費の仕方」「身体的健康」「心理的健康と幸福」「伝統文化」「地域活動」「生活水準」「環境」「教育」「良い政治」の9領域が設定されている。

このうち6つ以上が満たされている状態を「幸福」と定義しており、伝統文化を基盤とする「文化的幸福」やバランス志向に根差した「集団的幸福」を重視している点に注目する必要がある。幸福を支える経済的社会的要件と「幸福を感じる心」は別物であり、経済的社会的要件の上昇が「幸せを感じる力」を削いでしまうこともある。

東日本大震災で多くの子供たちの命が奪われた大川小学校が取り組んでいる、「人類全体が幸せにならなければ個人の幸せはない」という宮沢賢治の詩を中心にした「集団的幸福」「文化的幸福」の日本モデルを、世界に発信していく必要がある。

SDGsが示す持続可能な社会を実現するためには、「持続的幸福」の核になる「幸福を感じる心・力」を育成するウェルビーイング教育こそが時代の要請であると言えよう。このようにSDGsとウェルビーイングを一体的、包括的に捉える視点の共通理解を、日本発のESDの歴史的経緯を振り返ることによって深める必要がある。

13 「ホリスティック教育宣言」からSDGs・ウェルビーイングを捉え直す

ところで、1991年8月にアメリカで発表された「ホリスティック教育宣言」の序文には、「生態系の病と教育の病、両者の病の根は同じところにある」と書かれている。日本ホリスティック教育協会編『ホリスティック教育入門』によれば、同宣言の問題意識は次のように要約できる。

- (1) 現在の環境問題を引き起こしている自然支配型の産業文明は、主観と客観とを二元論的に裁断する認識図式、要素還元主義的分析的アプローチによって理解された機械論的世界観、及びそれと結びついた目的合理性に貫かれる技術論的操作的思考に立脚している。
- (2) それと同様に、近代的教育システムが露呈している複合的な原理も、根本的にはそのような特殊近代的な知の枠組みに根差している。
- (3) 従って教育の転換を、末期症状を呈している近代文明の転換に呼応しつつ行うには、システムに対する個別的な対症療法や延命治療よりも、まず教育を理解している知の枠組みそのものを転換する根本治療法が必要である。
- (4) そのために、それへ向けて転換すべき代案を「ホリスティック」と呼びうる視点に求め、その視点から教育の意味と課題を読み取り直してみる²⁰。

同宣言はホリスティック教育の推進組織であるGATEから『教育2000 ホリスティック・パースペクティブ』と題する冊子として刊行されたが、同宣言のホリスティックな視点とは、次の10原則である。

- (1) ホリスティック教育の基本的前提
- (2) 人間性の開発
- (3) 個性の尊重
- (4) 経験の中心的役割
- (5) 新しい教育者像
- (6) 選択の自由
- (7) 参加的民主主義への教育
- (8) 地球市民教育
- (9) 地球生命圏の教育
- (10) 精神性と教育²¹

この中で特に注目されるのは、第一に、個性を「相互依存関係における多様性」として捉えていることである。個人の間に違いがあるから、それぞれの特性を活かし合い補い合う相互依存関係が可能になる。単相林よりも雑木林の方がはるかに安定的で環境の変化に柔軟に対応できる。違いがあることが豊かさであり、画一的で同質的な集団よりも、多様性の高い共同体の方が、長期的に見れば、安定的で創造的である。違いを共に活か

し合い、補い合って新しい秩序を共に創る「共創」社会を築いていくことが、時代の要請である。

第二に、まず教師の「主体変容」が求められる「新しい教育者像」については、教育者と学習者が相互に学び合い、主客が交互に交代しつつ、循環的螺旋的に学習が深まり、循環的な相互形成が営まれることを重視していることである。

第三に、「自由」を「つながりの豊かさ」として捉えていることである。ブーバーは「強制の対極は自由ではなく、つながりである」と指摘したが、自由には、外的束縛からの解放 (liberty)、内的束縛からの解放 (freedom)、救い・涅槃・解脱 (salvation) などが含まれている。「自由」か「放任」か、「自由」か「規律」か、「自由」か「管理」かという2項対立的な固定観念から脱却する必要がある。つながりを絶たれた状態からは、何かを自分の意志で選び取るという自由は生まれ難い。

エーリッヒ・フロムの言う「～からの自由」にとどまらない「～への自由」という、何かに向けての選択を自らの意志で行うことが大切であり、自己が自己を超えるものとのつながりを感じている時に初めて、そのつながり方を選択する意志が生まれる。

このようなつながりの豊かさ、関係の持ち方の多様性としての、意味のある多様な選択肢が、児童生徒の生きる場の中に用意されていなければならない。

第四に、「学びの場自体が、共感的理解、自他の要求の分かち合い、正義、独自性のある批判的思考などを大切にすることでなければならない」と書かれていることである。すなわち、一言でいえば、共感的理解を土台にした批判的思考を求めている点である。

近代が称揚してきた批判的思考力や説得的な自己主張能力の必要性を認めつつも、それ以上に、他者とのつながりの自覚、すなわち、共感的理解、傾聴力、他者の痛みを自分の痛みと感じる感受性などが重要なのである。

第五に、「グローバル教育は、自然と人間と文化が分かち難くつながっていて相互依存の関係にあるという、エコロジカルなアプローチに基づくものである」「様々な異なる文化や世界観と向き合っている。人間の営みの驚くべき多様性を積極的に認められるようにする教育が今こそ必要である」と書かれていることである。

「統合性」「多様性」「相互依存性」は、生態系をモデルとするエコロジカルでホリスティックな世界観の三大原理であり、文化的多様性と人類的統合性との両立が求められている。異文化理解で重要なことは、単に違いを認め合い、多様性を承認するだけでなく、違いの奥に「通底する価値を探る」ことである。

自民族中心主義に対する文化相対主義の持つ意義は十分に尊重されるべきであるが、文化相対主義が、価値的倫理的相対主義に帰結し、文化の独自性を超える「多様性に通底する価値」を認めなければ、人類共同体の統合性のための価値規範の原理を見失うことになる。

文化的多様性と人類的統合性を両立させるためには、自民族・自文化中心主義、文化相対主義、脱文化的なコスモポリタニズムのいずれもから脱却する必要がある。

第六に、「私たちは、地球生命圏についての基礎的理解を促す教育を求めます。…この学習の中心は、生命維持の基本的システム、エネルギー循環、生命連鎖、相互依存関係、生成進化のプロセスなどの認識を得ることにある」と書かれていることである。

また、「教育はそもそも、あらゆる形の生命体の中に流れている<いのち>への、深い

畏敬の念に源を持つ営みでなければならない。…個人の幸福と地球全体の幸福が深いところで一致すること、そしてその中での各自の役割と責任の広さと深さ、これらの自覚を促す教育が求められている。教育は、グローバルでエコロジカルな見方に、しっかりと根差していなければならない」と書かれている。

SDGsの経済圏、社会圏の土台である「生物圏」とは「地球生命圏」にほかならず、教育の究極目的であり、道徳教育の原点である「生命への畏敬の念」は、生命誌に基づく「地球生命圏」の教育によってこそ培われるものである。

第七に、「精神性と教育」と題して、次のように述べていることである。

「精神性と出会い、精神性との絆が深まってくると、…自己と他者は深いところでつながりあっていること、日常の何気ない生活の中にも、確かな意味と目的があること、<いのち>は全体として一つで、その中ではすべてが支え合っていること、現代生活の忙しさやストレスや過剰な刺激に振り回されないひととき、何かを創造することの充実感、<いのち>の神秘に対する畏敬の念など。…人間の最も大切な、最も価値ある核心は、一人ひとりの内奥で働いている<いのち>—真の自己、魂などと呼ばれるものである…教育は、<いのち>との精神的な絆が健やかに育まれる営みでなければならない。教育の大切な役割の一つは、<いのち>においてはすべてがつながりあっていることを自覚できるようにすることである²²。」

廣池千九郎博士の「天功を助く」(廣池千九郎『道徳科学の論文』第7冊、270・400頁)、中国の古典『中庸』の「天地の化育に賛(たす)く」営みに他ならない。1990年6月に第1回ホリスティック教育国際会議が開催され、「シカゴ宣言」が出され、翌年の第2回同会議で、10の視点から「シカゴ宣言」を具体化する集中審議が行われ、その討議をまとめたのが『教育2000—ホリスティックな視点』で、ホリスティック教育の大綱的文書として注目される。

このホリスティックな視点は、その後の「持続可能な開発のための教育(ESD)」に継承され、今日のSDGs・ウェルビーイングの理論とも深い関係にある。本年福井で開催されるG7教育大臣会合において、以上詳述してきたホリスティックな視点に立脚した、新たなSDGs・ウェルビーイング教育のビジョン・プロジェクト構想を世界に発信したいものである。

14 ウェルビーイングを幸福学、心理学、脳科学から捉え直す

世界保健機構の執行理事会は、WHO憲章全体の見直し作業の中で、身体的、精神的、社会的側面に加えて、スピリチュアル・ウェルビーイングの定義を追加するよう提案し、スピリチュアリティに含まれる4領域と18下位領域²³を明確化した。

この点を踏まえて、ホリスティックな視点をベースにして、Well-beingをポジティブ心理学、アドラー心理学、幸福学や和の精神で捉え直す必要がある。1998年までは、鬱や精神疾患などについて研究するネガティブ心理学と幸福などについて研究するポジティブ心理学の研究の割合は17対1だったが、同年に米心理学会のセリグマン会長が、「どう

すると悪い状態になるか」ではなく、「どうすればうまくいくか」を研究する必要がある」と宣言し、ポジティブ心理学が世界中の大学の心理学教室で爆発的に広がった²⁴。

20年前は年間の研究は100件に過ぎなかったが、今や10倍に増え、医学、脳神経科学、経済学、経営学などの分野にも広がった。『幸福研究ジャーナル』等の専門誌に、幸福、Well-being、ポジティブ心理学に関する論文が多数発表され、同誌では、幸福研究を「人々の主観的な生活の評価や幸福という感情を中心に研究する複合領域研究」と定義している。

「人生満足尺度」という幸福度を測るアンケートを開発した、「幸福学の父」と呼ばれる幸福学の創始者エド・ディーナーは、20年間に発表された250本の論文をメタ分析し、幸福感において自己評価の高い人は、他者評価も高い傾向にあることを論証した。

幸福度を統計学的に測定し、幸福の因子を科学的に分析するポジティブ心理学の目標は「持続的幸福」にある。ポジティブ心理学の創始者であるセリグマンが提唱したWell-beingの5要素の「ポジティブな感情」「ポジティブな人間関係」「意味や目的」と、アドラーの幸福の3条件の「自己受容」「他者信頼」「他者貢献」や、「幸福学」の第一人者である前野隆司氏の「幸せの4因子」の「やってみよう」「ありがとう」「何とかなる」「ありのままに」因子には共通点がある。

さらに、樺沢紫苑『精神科医が見つけた3つの幸福』（飛鳥新社、令和3年）によれば、脳科学的には、幸福は「セロトニンの幸福」「オキシトシンの幸福」「ドーパミンの幸福」の3つと捉えることができる。樺沢は『言語化の魔力』（幻冬舎、令和4年）で、悩みには①「つらい、苦しい」ネガティブ感情、②対処法がわからず「どうしよう」、③「どうしようもない」と停滞、思考停止、の3つの特徴があり、悩みを分析する3つの軸として、①コントロール軸、②「今」にフォーカスする「時間軸」、③自分が変わる「自分軸」を提示し、視座を転換し、言語化、行動化すれば悩みは消える「究極の方法」として、①あきらめる、②やめる、手放す、③親切、感謝、他者貢献を列挙している²⁵。

朝日を浴びて歩行、呼吸、咀嚼などの基本的なリズム運動をすれば分泌されるセロトニンは幸福感、安心感の源であり、赤ちゃんがお母さんの乳首を吸うと分泌されるオキシトシンの主な作用は抗ストレス作用、摂食抑制作用であり、恐怖刺激に対するすくみ行動を抑制し、ドーパミンは集中力や意志の強さ、快感、プラス思考、多幸福感の源である。

ちなみに、発達障害は脳の障害であり、自閉症はセロトニンを回収するたんぱく質の機能低下、ADHDはドーパミンとノルアドレナリンの機能低下、LDはドーパミンなど、抑うつ症はセロトニン神経の機能不全と関係があるなどと指摘されている。

武蔵野学院大学の澤口俊之教授と日立基礎研究所、プレフロンティアが共同研究を行い、人間性知能の中核であるワーキングメモリ（短期記憶）がリズム運動時に順調に働いていることを、4, 5, 6歳児に光トポグラフィーを用いて、世界で初めて科学的に実証した²⁶。

静岡県函南さくら保育園は人間性知能を育む独自の教育プログラムを開発し、遠藤弥生『SAKURA.HQ教育メソッド』（どりむ社）²⁷を出版し、大阪の橋波保育園も筑波大学の研究者の協力のもとに、リズム運動の成果を脳科学によって裏付ける実証的研究を深めている。

同書によれば、人間性知能（HQ）の中核であるワーキングメモリをトレーニングするための具体的方法は、次の通りである。

- (1) 黙読
- (2) ノートに書く
- (3) 百玉算盤で計算する
- (4) 数字の単純計算を行う
- (5) 合唱・楽器演奏
- (6) 料理をしたり、料理の手順を語ってもらったりする
- (7) 百人一首の読み札を高速読みする
- (8) 自転車に乗りダート走行する
- (9) 読み聞かせなど、親が子供に積極的に関わる
- (10) 模擬的にコンビニへ行き買い物をするシーンを語ってもらう
- (11) 「あ」のつく言葉をたくさん書いてもらう
- (12) 指示されたある形をたくさん言ってもらう
- (13) 指示されたじゃんけんをする

セロトニン神経は数は少ないが、脳全体に分布しており、1個のセロトニン神経が数万の脳の神経細胞に指令を出す。セロトニンは大豆、のり、ごま、チーズ、マグロ、バナナ、卵黄等に含まれるトリプトファン、ドーパミンとノルアドレナリンは肉類、かつお節、タケノコ、牛乳、ピーナツ、アーモンド、バナナなどに含まれるチロシンと関係がある。

15 SDGsの土台「生命誌」から「生命に対する畏敬の念」のパラダイム転換を図る

服部英二氏によれば、「我思う、故に我あり」と説いたデカルトによって、理性のみが神とされ、「自然と対峙」する姿勢が生まれ、主観と客観が分裂し、「自然を非生命化」し、母なる自然が人間の理性の対象となり、自然が人間によって「篡奪されるべき資源」とみなされるようになった²⁸。人間と「自然との離婚」が起きたのである。

「生命誌」の体系から逸脱した物心二元論は科学技術と物質文明を飛躍的に発展させたが、それが諸刃の剣となり、地球環境の危機を招来した。現代文明は「所有の文明」であり、「存在の文明」ではないから、本来の自己ではない外的自然を「資源」とみなして篡奪する「自然帝国主義」に陥り、持続可能な発展が不可能になった。そこで、国連はSDGsという救いの目標を立てたが、服部英二氏によれば、SDGsの17の目標はピラミッド型になっており、「生物圏 (biosphere)」という土台ができなければ2段目の社会的な目標も3段目の経済的な目標も達成できないことを示している。

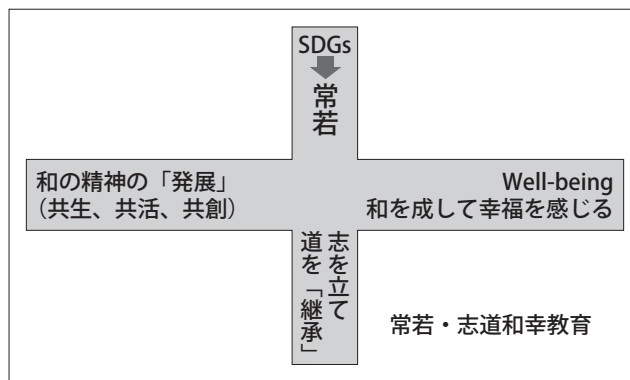
廣池千九郎生誕150周年記念第12回地球システム・倫理学会学術大会において、服部英二氏は“Sustainability”を「持続可能性」ではなく、「とこわか (常若) の世」と訳した²⁹。私たちはこの問題意識を継承し、生物圏の生命の「継続性」に注目した中村桂子氏の「生命誌」³⁰を「常若」教育の重要課題と位置づけ、現在の自分を起点として過去の祖先とのつながりを見つめさせる「生命に対する畏敬の念」ではなく、38億年前の過去の生命の誕生から現在の人類、そして未来を見つめさせるという「生命に対する畏敬の念」のパラダイム転換を図る道徳授業の実践化に取り組んできた。

また、Well-beingの理論をポジティブ心理学、アドラー心理学、前野隆司氏³¹の幸福学

を柱に理論的に整理し、「幸せの4因子」を中心に「感知融合の道德教育」に生かす授業実践を積み重ねてきた。

子供のWell-beingの構成概念は、①身体的②心理面③社会的場面④自分の未来を創造する力、に分類される。①の中核は生活のリズムであり、リズム(律)には「旋律」などの音楽や体操、言葉のリズムという意味と「規律」などの道德規範の二つの意味があることに注目し、日本人の美しい心を五七五七七の短歌に凝縮した「敷島の道」や、和太鼓、武士道などに代表されるわが国の「道」の文化に日本型Well-beingの原型があると考え、短歌創作を「感知融合の道德教育」に生かす実践にも取り組んだ。

③の対人関係の中核は「和」、②の中核は「幸福感」、④の中核は「志・夢・目標」であると捉え、このWell-beingの4つの視点を融合させ、図のような「志を立て」「道を継承」という縦軸の「常若」を継承し、横軸の和の精神を発展させて「和を成して」「幸福を感じる」という「常若・志道和幸福」教育を、日本発のSDGs・Well-being教育として構想し、これを「感知融合の道德教育」の「感じる」「気づく」「見つめる」「深める」「対話する」「協力し働きかける」という6つの視点から体系化、実践化してきた。



SDGsの「社会的目標」と「経済的目標」を支えている「文化」を継承する縦軸の伝統的な国民道德である「道」の継承と、横軸の和の精神の発展を繋ぐ実践として短歌創作を道德教育に生かし、「情動の言語化」によって、「内なる願い」に気づかせ、感性的認識と知性的認識が融合し、「自己一致」(カール・ロジャーズ)を深め、山川洋一長崎市立西北小学校元校長の言う「道を求め徳を成す」道德に向かう「実践的意欲と態度」を育てた。

「生命誌」を道德教育に導入する先駆的授業に取り組んできた世田谷区立山崎小学校の山崎敏哉教諭は、生命は「多様だが共通、共通だが多様」である点を日本道德教育学会第100回大会の共同研究発表で強調したが、「多様性に通底する価値を探る」対話をいかに実践化するかが、道德教育の今日的課題といえる。

そのヒントを示唆してくれるのが、ユネスコ創立60周年記念事業(国際日本文化研究センター・道德科学研究センター共催)として2005年にパリで開催された国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値—聖俗の拮抗を廻る東西対話—」の「最終公式声明」である。

同シンポは、服部英二氏が特別補佐を務めたユネスコ事務局長松浦晃一郎氏の開会の挨拶から始まった。

同声明の注目される内容を抜粋しよう。

<普遍的な (universal) 価値というよりは、文化間に「通底する (transversal) 価値」がいかにか異文化間の相互学習に道を開いているかということをお問わざるを得ない…「和」の概念とは、「異なるものの調和」であると同時に、「和解に基づく平和」を意味するものであり、「和して同ぜず」とは同化することなく調和することを意味している…文化の多様性は、真の対話のために必要な材料である。文明が衝突するのではなく、「文明に対する無知」が紛争を招くのである。…対話とは、思考のプロセスを再考し、確信されてきたものを再吟味し、新たなものを発見しつつ前進する、日々新たな手段である。それは旅に出ることであり、対決であり、試練であり、変容である。中でも強調すべきは、対話の持つ改善力である。このような意味で、「文明間の対話」から「対話の文明」へと移行することが示唆された…対話のための理想的な場としての「道」の概念は、ユネスコの事業により長い時間をかけて育成されたものである。…グローバル化が文化を画一化する危機を募らせ、また、全ての文明をその本来の基盤である地球から切り離す危機が高まっている現在、土地や環境の特殊性を考へることがますます重要になってきている。…人間の実存は、近代的個人の限界を超えて再考されなければならない。「生に向かう存在」のパラダイムによって、人間存在は、その対話の相のもと、通底し、結ばれる存在として未来に引き継がれる。それは、人間存在を、生命圏の中で、生命の循環を保障するという至上命令に向かって開くものである³²>

服部英二氏によれば、「AはBでありながら、同時に非Bであることはできない」という「排中律」の論理では、「色即是空」「一即多、多即一」という「即」で結ばれる命題は排除される。「即」で結ばれる大乘仏教を理解するには、「包中律」という新しいパラダイムである「第三」の「間」という「通底の論理」が必要になる。Aと非Aは相互率によって共存し、青の背景と黄色のひまわりを組み合わせ、正反対に位置する関係の色同士の「補色」を活かして五つの色を併置することによって、「すべての光になる」印象を与えるゴッホの絵「ひまわり」が、多様性の意義を象徴している。服部によれば、普遍の原理は「一つのところに向かっていく」「同じで和せず」であるのに対して、通底の原理は『論語』の「和して同ぜず」という「生命の実相の生成の原理」である。また、「通底の価値」は、「感性のみによるものではなく、あくまでも互恵の立場に立ち、感性・霊性と響き合う理性によってのみ到達可能なもの」³³である。

16 中村桂子「生命誌」は「歴史物語を読み解く知」 —自然と人間の力を活用する社会

「生命誌」とは、「対話」で作りに上げていく「知」であり、生物学の最先端であるDNA研究の成果を踏まえ、約40億年という平等な歴史を背負うものとして、人間を含むすべての生物の多様性と相互の関係を捉えなおそうとする、中村独自の理論である。

中村桂子『ゲノムが語る生命—新しい知の創出』(集英社新書)によれば、「生命を基本とする知」のキーワードは「生きる」「変わる」「重ねる」「考える」「耐える」「愛づる」「語る」

で、「根っこ」を張るところを探し、どっしりと根を下ろしながら、「翼」を広げて飛んでいくことを夢見る若者を育てることの大切さを説いている。

NHKテレビの「人間講座」のテキストに少し加筆した、中村桂子『生命誌とは何か』（講談社学術文庫）によれば、現代の科学技術は人間を生きものとして見た時に大事にしたい価値を生かしたのものにはなっていないという。

同書は、生命誌から見えてきた生きものの姿をまとめ、生きものの歴史を踏まえた価値観をしっかり持ち、日常と学問をつなぐという考え方を取り入れた、「自然の活力と人間の力をすべて活用する社会」³⁴づくりの新たな道を提案している。

同書によれば、生物の共通パターンは、①積み上げ方式、②内側と外側がある、③情報によって組織化され、独自のものを産み出す（自己創出系）、④情報のかき混ぜで複雑化、多様化が起きる、⑤偶然が新しい存在につながる、⑥少数の主題で数々の変奏曲を奏でる、⑦常につくられたり壊されたりしている（代謝）、⑧資源と排泄物、生産と消費等が相互に循環しネットワークを作っている、⑨最大より最適が合っており、バランスを保つことが大切、⑩柔軟なあり合わせ、⑪協力的な枠組みの中で競争している、⑫生きものは相互に関係し依存しあっていることにあり、これらを生物から学ぶ必要があるという³⁵。

中村によれば、「矛盾に満ちたダイナミズム」こそが「生きものを生きものらしくしている」のであり、生物の特徴は次の7点にある。

- (1) 多様だが共通、共通だが多様
- (2) 安定だが変化し、変化するが安定
- (3) 巧妙、精密だが、遊びがある
- (4) 偶然が必然となり、必然の中に偶然がある
- (5) 合理的だが、ムダがある
- (6) 精巧なプランが積み上げ方式でつくられる
- (7) 正常と異常に明確な境はない³⁶

合理性だけを求めて進めてきた近現代の人工社会が、生命誌で追ってきた38億年を超える生きものをつくる世界と合わないことが明確になった。そこで、自然・人・人工を一体化し、これを結びつける基本である生命という原点に立ち返って、自然に合わせながら、ダイナミズムを楽しむ「新しい神話の時代」が到来した、と中村は説く。

科学は客観性を重視し、人間は観察者として外へ出たが、これでは自然をそのまま捉えることはできないので、改めて内へ入り込むことが必要になった。中村は「新しい神話づくりへ向かうプロセス」だったと位置付けている。

構造主義では「差異」をキーワードにするので、自己や個という言葉を否定することになるが、主義でなく生きものの「自己創出」という構造を見つめていくと、自己を創出するからこそ差異が生じることがわかる。前述した「普遍でありながら多様」「多様でありながら普遍」という見方が本質を衝いていることがわかる。

そこで中村は、こうした生命誌研究の成果を踏まえて、次の6つの「ライフステージ」という視点に立脚した「自然の活力と人間の力をすべて活用する社会」を目指すとしている。

- (1) 個人の要求に応える
- (2) 一生を見通す
- (3) 病人・障害者・老人・子どもなどの弱者をステージの一つとみる
- (4) プロセス重視（ステージ間の移行）
- (5) ステージ間の相互関係
- (6) 地域を基盤にした生活³⁷

具体的には、進歩一辺倒の「大量生産・大量消費型から循環型社会への転換」「一人ひとりの人間がその一生を思う存分生きられる社会」を目指すという。この「ライフステージ」という考え方の利点は、過程、多様性、質という生物の基本に目を向けることによって、健常者と弱者、正常と異常という区別がなくなることにある。

中村桂子編『和 なごむ・やわらぐ・あえる・のどまる』（新曜社）によれば、グローバル化とはアメリカ型社会に均一化することではなく、「和える」につながるもので、日本文化から世界に提案できることがたくさんあるという。和の本質は、意見の違いや立場の違いを認めながら、新しいものを見出していく「和して同ぜず」の心である。

日本文化の基層を表す「あえる」は「個々の姿を保ちながら調和の世界を築き上げる」言葉で、「和（なご）む」「和（やわ）らぐ」「のどまる（のどかになる）」もキーワードである。

中村桂子・鶴見和子『40億年の私の「生命」』で取り上げた事例³⁸は、大変興味深いものである。人間の手はプログラムされた「細胞死」によってできる。細胞は5本の指を作れ、ではなく、指の間に4つの谷間を作れと命令される。谷間にあたる部分にある細胞は、胚の中で自らの命を絶つことによって、指を作ってくれる。つまり新たな命が誕生する前に死んでいく細胞があって、私たちの体はできていくわけである。

J.C.スマッツ著『ホーリズムと進化』（玉川大学出版部）の共訳者である石川光男は、死んだ細胞が外壁を覆って、新たに生まれる胃の細胞との幕間つなぎをしている、生と死の関係構造の理（ことわり）を感じる「理観」の重要性を説いた。

中村桂子は1977年にノーベル化学賞を受賞したプリゴジンと2回対談し、プリゴジンの「散逸構造論」「カオス理論」と南方熊楠の曼荼羅論とが重なり合う点に注目している。「散逸構造」とは、岩石のようにそれ自体で安定した構造を保っているような構造とは異なり、潮という運動エネルギーが流れ込むことによって生じる内海の渦潮のように、一定の入力のある時にだけその構造が維持され続けるようなものを指す。

無秩序と混沌（カオス）の中に常にある「揺らぎ」が「ポジティブ・フィードバック」を引き起こした時、「自己組織化」の過程を通して、混沌から秩序ある構造が自発的に生じてくる、というのがプリゴジンの「散逸構造論」である。

カオスは混沌を意味し、初期値がほんの少しずれるだけでその式に沿って現れるその後の世界が大きく変わるという特徴を持つ。どこかでチョウが羽ばたくと、遠方の気象が大きく変わるという「バタフライ効果」はよく引かれる有名な例である。

生命の原初形態である粘菌（動物と植物の境界領域の生きもの）の研究が、真言密教の曼荼羅とつながっている点が興味深い。中村桂子『絵巻と曼荼羅で解く生命誌』（青土社）によれば、多様な生きものはすべて細胞でできているという「共通性」があり、その意味で「みんな違うけれど、基本は同じ」である。

ギリシャ辞典によれば、“history”の第1の意味は「探求すること」、第2は「誌(しる)す」こと、第3は「歴史」で、探究すればそれを書き留めたくなくて誌していく。それが積み上がると歴史ができるわけであると、藤沢令夫京大教授は『藤澤令夫著作集』(岩波書店)で指摘した。

20世紀はヨーロッパを基本にした進歩史観を科学技術の発展が支えた時代であったが、21世紀に入り、進歩史観と現代科学技術の組合せが持つ欠陥が浮き彫りになった。ダーウィンの適者生存の進化論を超えた「歴史物語を読み解く知」として、中村桂子は「生命誌」、鶴見和子は「南方曼荼羅」という新しいパラダイムを提唱した。

伊勢志摩で開催されたG7サミット「声明」では、物心二元論、主客二元論に立脚する盲目的な「進歩」の概念が物質的な文明論を生み出し、「二つの対立するイデオロギー」すなわち「文明のグローバル化の中に『成長』を見る科学技術的な見地」と、その反対に、「文化的価値=Cultural Identity」の価値を尊重し、『多様性』を守ろうとする立場、の根深い対立思想の背景には、科学と文化伝統は本質的に相容れず、越えがたい深淵に阻まれている、といういわれなき思い込みがあり、この危機に対処するためには、異なる文明の中に「通底する価値」を掘り起こす必要性が強調された。

「進歩」という効率性、利便性、均一性だけの「機械論的世界観」から「生命論的世界観」への転換³⁹が求められており、生き物は機械とは異なり「多様の内発」が継続している「進化」を遂げている点に注目する必要がある。

1995年に開催されたユネスコ創立50周年記念シンポ「声明文」でも、「最近、量子力学をはじめとする最先端の科学は、全一的秩序が存在することを発見するに至りました。万有の相関と相互依存を説くその新しい全一論によれば、全は個に、個は全に遍照する。これがメッセージの概略です」と述べ、人間は母なる地球と共に永遠の「死と再生を繰り返す」相互依存の存在として再把握された。

服部氏によれば、これが「ともいき」「とこわか(常若)」の思想に他ならない。この「相互依存の実相」を「感知融合」の視点から道徳教育に導入する試みが、「生命誌」から「生命に対する畏敬の念」を捉え直してパラダイム転換を図る道徳授業実践と位置付けられる。

マルローは「伊勢は雄弁に永遠を物語っている」と述べ、伊勢神宮を訪れたトインビーも「この聖なる地で、私はすべての宗教に通底する一なるものを感じる」と述べた。また、2001年に開催されたユネスコ総会は満場一致で、多様性と互恵の精神の重要性を強調した「文化の多様性に関する世界宣言」を、満場一致で採択した。

その第一条には「文化的多様性は人類共通の遺産であり、その第三条には、文化的多様性は「知的・感情的・道徳的・精神的生活を達成するための手段として理解すべき、発展のための基本要素」であり、第七条には、「創造は、文化的伝統の上に成し遂げられるものであるが、同時に他の複数の文化との接触により、開花するものである」と明記されている。

こうした国際的動向を踏まえ、自然を「非生命化」して資源と見做したことによって「人間と自然の離婚」、地球環境の破壊を招来した点と、文化的伝統と「多様性に通底する価値を探る」対話を重視する観点から、生命誌、伊勢神宮、短歌創作に焦点を当てた「常若・志道和幸福」教育の理論と実践について、日本道徳教育学会第100回大会「ラウンドテーブル」で共同研究発表⁴⁰をさせていただいた。SDGsとWell-beingの視点を道徳教育の内容と

してどのように具体化するかが、道德教育の今日的課題と言える。

教育立国推進協議会が提言した「志教育」を道德教育にいかに関与導入すべきかについて検討するとともに、SDGsを自分事として捉え、「三方よし」を実現する道徳的実践意欲・態度につなげる実践の深化が求められている。

国連事務総長から依頼されたSDGsの「本質の哲学」を、本稿で考察してきた日本文化の伝統的価値観で「充足」させるためには、ホリスティックな視点から日本が提案した「持続可能な開発のための教育(ESD)」とSDGsの17の目標との関係を総点検し、玉石混交のごった煮のSDGsの目標を本質的に捉え直し、整理する必要がある⁴¹。

ウェルビーイングについても、WHOの健康の定義にスピリチュアルな側面が加えられた点を踏まえた上で、ポジティブ心理学、アドラー心理学、幸福学などの研究成果を、ホリスティックな視点から包括的に捉え直すとともに、日本の伝統文化に根付いている日本型ウェルビーイングの原型を創造的に再発見して活用する必要がある。

毎週自民党本部で開催され、オブザーブを要請されている日本Well-being計画推進特命委員会において、以上述べてきた考察に基づく提言を行い、5月に開催されるG7教育大臣会合で日本発のSDGs・ウェルビーイング教育のビジョンを国際発信することを提案したい。

17 おわりに一今後の課題

以上、SDGsとESD、ウェルビーイングの関係を中心に考察し、ホリスティックな視点から「SDGsの目標達成に不可欠な実施手段」であり、「SDGsの成功の鍵」と2019年の第40回ユネスコ総会で採択されたESDについて考察した。また、SDGsの経済圏、社会圏の土台である「生物圏」を「生命誌」の視点から捉え直し、ウェルビーイングをポジティブ心理学、アドラー心理学、幸福学、脳科学、ホリスティック教育の視点から考察した。

さらに、SDGsを日本の「とこわか(常若)」の英知で捉え直して、日本文化の伝統的価値を創造的に再発見し、ウェルビーイングを「和して同ぜず」の和の精神を発展させて、「和を成して、幸せを感じる」「志道和幸福」として捉え直す、日本発のSDGs・ウェルビーイング教育の国際発信について問題提起した。

SDGsについては、17の目標の関係性が不明確であり、根本的に再検討する必要があるため、SDGsの歴史的背景と思想的流れを十分に踏まえて総合的、包括的に考察する研究会を新たに立ち上げて論点を整理し、国内外にわかりやすく説得力のある発信をしたい。

ウェルビーイングについても、これまでの議論は企業との関係に焦点が当てられがちであったが、SDGsとESDとの関係に留意しつつ、ポジティブ心理学、アドラー心理学、幸福学、脳科学などの科学的知見に基づいて、ホリスティックな視点からさらに論点整理を行い、日本型ウェルビーイングの原型にも学びながら、日本発のSDGs・ウェルビーイング教育の構想を練り上げたい。

これらの研究課題に取り組むため、日本道德教育学会と日本家庭教育学会の幹部が中核となって積み重ねてきた「脳科学などの科学的知見に基づく家庭・道德教育研究会」を発展的に解消し、家庭教育、道德教育の「理論と実践の往還」を深める視点を堅持しつつ、

日本発のSDGs・ウェルビーイング教育の包括的研究を新たに進めたい。

注

- 1 令和3年8月10日に明治神宮において「日本ASEAN次世代交流フォーラム」が開催され、麗澤高校生6名を含む日本の若者とASEAN留学生の文化交流が行われた。まず「百年の杜」の映像が大画面に映され、全国より10万の献木が寄せられ、11万人の青年たちが上京して植樹などの奉仕活動に参加し、明治天皇をおまつりする「永遠の杜」づくりに励んだ思い、100年のバトンを次世代に受け継ぐことの大切さを確認した。同フォーラムを後援した外務省の国際文化交流審議官の来賓挨拶に続いて、「オリンピズムと武道」と題する講演、アセアン各国紹介、学生スピーチ（日本青年会議所アジアアライアンス構築委員会学生優勝チームなど）を経て、実行委員長である私が全体の総括を行った。
- 2 中村桂子・鶴見和子『40億年の私の「生命」』藤原書店、平成25年、29頁
- 3 南方熊楠全集第7巻、平凡社、昭和27年、559頁
- 4 神社新報、平成10年8月17日付1面トップ記事
- 5 鶴見和子が南方熊楠思想の根源を成すモデルとして紹介した図で、仏教哲学者の中村元が「南方曼荼羅」と呼んだ。鶴見和子・頼富本宏『曼荼羅の思想』藤原書店、平成17年、参照
- 6 様々な因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する地点。南方曼荼羅の中心は驛点の移動にあり、何物も何事も排除せずに配置を変えることによって社会変動をもたらし、それぞれの個は全体の中に異なる意味を与えられることになる、という示唆に富む新しい「創造的流転」の組織論。固定観念ではなく、可能性の理論といえる。
- 7 『代々木』平成15年秋号「社頭述懐」、明治神宮崇敬会、平成15年9月
- 8 拙編著『感性教育』至文堂、平成9年、190-196頁
- 9 拙著『日本文化と感性教育』モラロジー研究所、平成13年、82-87頁
- 10 同77頁
- 11 拙稿「世界が驚く日本の感性価値の創造的再発見・再構築」モラロジー道徳教育財団「道徳サロン」連載69、令和4年5月23日、参照
- 12 J・Cスマッツ著、石川光男・片岡洋二・高橋史朗共訳『ホーリズムと進化』玉川大学出版部、平成17年、「あとがき」参照
- 13 所功『伊勢神宮と日本文化一式年遷宮“常若”の英知』勉誠出版、平成26年
- 14 同
- 15 同
- 16 座談会「海外教育制度等調査を終えて」『臨教審だより』第11号、臨時教育審議会、昭和60年11月
- 17 OECDが1999年～2002年にかけて行なった「能力の定義と選択」プロジェクトの成果で、多数の加盟国が参加して国際的合意を得た能力概念
- 18 伊勢雅臣『この国の希望のかたち』グッドブックス、令和3年、68～84頁
- 19 同、212頁
- 20 日本ホリスティック教育協会編『ホリスティック教育入門』せせらぎ出版、平成17年、110—111頁
- 21 同、112-144頁
- 22 同、135-137頁
- 23 表 WHOの健康概念：スピリチュアリティに含まれる4領域と18下位領域

第1領域 個人的な人間関係 (Personal Relation)	1. 親切、利己的でないこと (kindness to others/selflessness) 2. 周囲の人を受容すること (acceptance of others) 3. 許すこと (forgiveness)
---	--

第2領域 生きていく上での規範 (Code to live by)	4. 生きていく上での規範 (code to live) 5. 信念や儀礼を行う自由 (freedom to practice beliefs and rituals) 6. 信仰 (faith)
第3領域 超越性 (transcendence)	7. 希望, 楽観主義 (hope/optimism) 8. 畏敬の念 (awe) 9. 内的な強さ (inner strength) 10. 人生を自分でコントロールすること (Control over your life) 11. 心の平穩, 安寧, 調和 (inner peace/Serenity/harmony) 12. 人生の意味 (meaning of life) 13. 絶対的存在との連帯感 (connectedness to a spiritual being or force) 14. 統合性, 一体感 (wholeness/integration) 15. 諦念, 愛着 (detachment/attachment) 16. 死と死にゆくこと (death and dying) 17. 無償の愛 (divine love)
第4領域 宗教に対する信仰 (specific religious beliefs)	18. 宗教に対する信仰 (specific religious beliefs)

- 24 マーティン・セリグマン『ポジティブ心理学の挑戦—“幸福”から“持続的幸福”へ』Discover21、平成26年
- 25 樺沢紫苑『精神科医が見つけた3つの幸福』飛鳥新社、令和3年、同『言語化の魔力』幻冬舎、令和4年
- 26 澤口俊之『幸せになる成功知能HQ』講談社、平成17年
- 27 遠藤弥生『SAKURA.HQ教育メソッド：HQとワーキングメモリ実践』どりむ社、平成24年
- 28 服部英二『文明間の対話』麗澤大学出版会、平成15年
- 29 拙稿「ウェルビーイングを日本発『志道和幸』教育として実践化する試み—『志を立て、道を求め、和を成し、幸せを実感』する教育」モラロジー道德教育財団「道德サロン」拙稿連載74、令和4年、参照
- 30 中村桂子『生命誌とは何か』講談社学術文庫、平成26年
- 31 前野隆司『幸せのメカニズム—実践・幸福学入門』講談社現代新書、平成25年、同『脳はなぜ「心」を作ったのか』ちくま文庫、平成22年、同『実践ポジティブ心理学—幸せのサイエンス』PHP新書、平成29年、同・前野マドカ『ウェルビーイング』日本経済新聞出版、令和4年
- 32 服部英二監修『ユネスコ・国連大学シンポジウム「科学と文化の対話」—知の収斂—』麗澤大学出版会、平成11年、同監修『文化の多様性と通底の価値—聖俗の拮抗をめぐる東西対話』同、平成19年、モラロジー研究所道德科学研究センター編『グローバル時代のコモンモラルティの探求:2002年、国際会議報告』モラロジー研究所、平成17年
- 33 服部英二『未来を創る地球倫理』モラロジー研究所、平成25年、168頁
- 34 中村桂子『生命誌とは何か』講談社学術文庫、平成26年、266頁
- 35 同、250頁
- 36 同、255頁
- 37 同、263頁
- 38 ホークランド、ドットソン著、中村桂子・中村友子翻訳『Oh！生きもの—生物のみごとなくみ』三田出版会、平成11年、191頁に掲載
- 39 石川光男『複雑系思考でよみがえる日本文明』法蔵館、平成11年、同『21世紀のパラダイム・シフト—ニューサイエンスの世界観』たま出版、昭和60年、小林道憲『複雑系の哲学』麗澤大学出版会、平成19年、参照
- 40 拙稿「持続可能な社会を実現するために道德教育に何ができるか(2)—SDGs・ウェルビーイングを『常若・志道和幸』教育として実践する『感知融合の道德教育』の試み」モラロジー道德教育財団「道德サロン」拙稿連載97、令和4年、参照
- 41 ジェイソン・モーガン「国連がふりまくSDGsに仕込まれた猛毒」(『WiLL』令和3年12月号)並びに、「道德サロン」の拙稿連載109「SDGsの根本的再検討」参照